

タイトル:平成 27(2015)年度 教育セミナー(第 11 回)

日時:平成 27 年 9 月 21 日(月・祝)～24 日(木)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

「グローバル都市香港の舞台裏 — インドネシア人ムスリム家事労働者たちの暮らしと労働」

小栗 宏太 (オハイオ大学大学院政治学科修士課程修了)

今回の教育セミナーは、私にとっては初めての日本での本格的な研究セミナーへの参加でした。

こういう言い方が適切かわかりませんが地方のあまり研究が盛んではない大学出身で同級生やよく知った先輩後輩にも大学院に進学した人はごくわずかで、大学院もアメリカの院に進んでしまったためこれまで研究の道をこころざした同世代の日本の若者と知り合う機会がこれまであまりなかったため、とても刺激になり、また勇気づけられました。

また中東やイスラームもこれまでの私が中心に取り組んできた研究テーマではなかったため、この分野の専門家の先生方や大学院生と知り合うのもまた新たな経験でした。

そんな風に二重の意味で新参者の私だったので、本当に参加してよいのかと迷う思いもあり、実際にとっても緊張して会場入りしたのですが、そんな不安がばかばかしくなるほどに溶け込みやすいアットホームな(それでいてとても知的な)雰囲気セミナーで、もともと新しく出会う人との交流があまり得意ではない私も積極的にディスカッションに参加したり、また昼食時には講師の先生方や他の参加者と楽しく歓談することができました。これもひとえに、講師の先生方やスタッフの皆様、そして歴代参加者の方々がこれまでのセミナーの歴史の中でつちかかってきた門戸の広さと専門性の高さを両立する素晴らしい伝統があるからなのだろう、と推測します。

肝心の研究発表のほうでは、他の発表者との差を痛感しました。他の皆様がきわめて限定された特定の時代・地域の特定の事例について特定の研究手法でもって専門性の高い研究をすすめられている中で、これまで特定の専門らしい専門ももたずにのびのびとやってしまった私の発表テーマはとてどもぼんやりとしたもので、事前に郵送された他の発表者の方々の発表タイトルと要旨をただで恥ずかしくなり逃げ出したくなりました。

それでも逃げ出さなくて本当によかった。つたない発表だったとは思いますが、講師の先生方や他の受講生の皆様は質疑応答の中で優しくこちらの助けになるような質問をしてくださり、自分一人で考えていたのでは思いつかないようなひらめきをいくつも得られました。特に大きかったのは、今回のセミナーへの参加を通じて、これまで定まっていなかった研究の「軸」を見いだせたことです。帰りの新幹線の中で(打ち上げに参加できなかった悲しみとともに)セミナーの思い出を反芻しているうちに、突然ひらめきがおきて、私の発表に対する質問・コメントの中にある共通するテーマがあることに気づき、それが今自分があつまっている問題の核心なのではないか、と思うようになりました。目下この新しい発見を軸に研究計画を練り直しているところです。このようなひらめきは、このセミナーに参加していなければ得られなかったものでしょう。

この経験から、私は自分と同じような地方の大学、あるいは海外の大学出身でこれまで日本の研究者

と交流する機会の少なかった人、そしてまだ自分の研究テーマをはっきりと定められていない人にこそ、このセミナーを薦めたいと思います。そんな人こそ参加すること、発表することにしりごみしてしまうと思いますが、少し勇気を出して参加すれば、その分得られる者も大きいはずです。そしてそんな勇気を受け入れてくれるとても広い(そして深い)懐を持ったセミナーだと、私は実感しています。

本当にお世話になりました。ありがとうございました。